

2020 年度事業 進捗報告書（実行団体）

- 提出日：2022年 9月 30日
- 事業名：被災者の心の健康を守る福島支援事業
- 資金分配団体：一般財団法人 ふくしま百年基金
- 実行団体：特定非営利活動法人 いわき放射能市民測定室

① 実績値

アウトプット	指標	目標値	達成 時期	現在の指標の達成状況	進捗 状況 *
1-A 双葉郡から避難の比較的高齢者向けに「たらちねお話し会」を実施数	お話し会の実施回数	2ヶ月に1回	2024 年3月	2回実施（予定は2回実施）コロナ感染拡大下での事業実施が困難な時期があったため実施回数が減った。しかし、コロナ禍の状況にも慣れてきたので、今後は参加者の意見を聞きながら、できるだけ予定通りに実施していきたい。	3
1-B 双葉郡から避難している比較的高齢者の「たらちねお話し会」への参加数	お話し会の実施回数	1回に10名以上程度の参加者数	2024 年3月	1回の参加者合計13名。目標値は超えている。	1
1-C 双葉郡から避難している比較的高齢者の「たらちねお話し会」への参加者の声	参加者へのインタビュー	参加者がいわき市で疎外感を感じることなく生活を楽しめるようになること。 事業開始時期からの心的変化をインタビューする。	2024 年3月	参加者の声は「楽しい」「できるだけやってほしい」などの声がほとんどである。	1

2-A 大熊町から会津に避難している母親たちが、汚染の実相を知るため、大熊町と会津の環境放射能測定を実施する	放射能測定の実施と測定結果のレポート	年間を通して、大熊町・会津地方の放射能測定を実施。二つの「生きる場」の測定結果をレポートにし発表できる形にする。	2024年3月	測定は随時実施している。また、その結果を子どもたちの生活環境改善のために役立てることも行っている。たらちねの顧問でもあり、大熊町の除染委員会のメンバーだった東京大学の小豆川勝見氏と大熊町のお母さんたちが連携し、大熊町の義務教育校（令和5年開校予定）近隣の除染の依頼を町に行っている。まだまだ、汚染濃度の高い場所があり、除染の必要な箇所も多いので、今後も専門家と協働しながら、子どもたちの健康を守っていききたいと思う。	1
2-B 大熊町から避難している母親たちが実施する「お泊まり会」の実施数	お泊まり会実施回数	夏休み・冬休み・春休みの年3回実施	2024年3月	2022年8月末での実施数1回。	2
2-C 大熊町から避難している母親たちが実施する「お泊まり会」の参加者人数	お泊まり会実施回数	1回20名程度の参加者	2024年3月	参加者合計17名。目標値よりも少なめだが、昨年の1回目9名に対し、2回目は17名と増えている。令和5年には、大熊町の義務教育校に通い始める子どもたちもいる。高濃度の汚染の中で、子どもの健康をどのように守っていくか苦慮する保護者の心の悩みや子どもたちの健康増進を共に考える活動が必要になると思う。このお泊まり会の役割は大きなものになっていくと思う。	2

3 双葉郡労働者の健康不安の解消・健康診断と相談受付の実施	利用者数／雇用者の意識動向（観察により判断）	健康診断、相談利用は1年に70名程度。雇用側からも相談依頼があるなどの状況になること。	2024年3月	<p>受診者数 64 名。事業開始時点では雇用側は消極的であったが、今年度に入り雇用者からの申し込みも増えている。個人的意識の高まりも重要であるが、雇用側の社会的意識も重要である。その点において少しずつ改善されていると思う。</p> <p>原発の収束には数百年かかると言われている。その年月を支えていく労働者たちが健康で幸せに暮らせるために、ますます、重要な活動になっていくと思う。</p>	2
4-A 震災当時 18 歳以下だった人々への子どもドック手帳の配布数	手帳の配布部数	1 年間に 300 部の配布ができるようになる。	2024年3月	配布数 26 部。現在のところ、目標の 1/5 程度の推移である。	3
4-B 震災当時 18 歳以下だった人々への子どもドック手帳の配布による精神的安定の測定	子ども本人と保護者へのインタビュー	子どもたちが健康に留意し生活してきたことを科学的に証明できること。その説明を精神的な負担なく行えること。	2024年3月	<p>保護者への聞き取りでは「避難しなかった自分をせめていたが、子どもドックを受診させ、手帳をつけることで積極的に子どもの健康を守っていることが実感できている。」との声が多くあった。子どもたちからは、「自分の健康を守ってもらっており、自分達は大丈夫だ、というふうに感じている。」との声があった。</p> <p>原発事故由来といわれる小児甲状腺癌の患者による裁判の数は少しずつ増えている。「あの時、避難しなかったけれども、大丈夫なのか？」ということを心配している母親は多い。今後も、子どもたちの健康の見守りと、母親の心を守る活動を継続していきたい。</p>	1

5-A 子どもたちの遊びのケアと非言語マッサージのケアの利用数	利用者の人数	1ヶ月に12名程度の利用	2024年3月	利用者数59名。コロナ感染拡大でキャンセルが相次ぐ中ではあるが、目標の人数をほぼ維持できている。	1
5-B 子どもたちの精神状況改善の観察	改善が見られるまで通所できるか、現場の観察から評価する	継続的に利用し、ケアが必要なくなり「卒業」できる状態で終わられること。	2024年3月	継続的な利用はあるが、「卒業」を迎えられる状態の子どもはいない。子どものことは家庭環境の問題もあり、目標に達する難しさを感じている。しかし、へこたれることなく、子どもたちに寄り添い尽くしていきたいと思う。	3
6 心の疲労が著しい子育てをする母親にボディワークによる非言語のケアの実施数	利用者の人数	1ヶ月に4名程度の利用。コロナ禍でも利用しやすいプログラムを案内し活用してもらおう。	2024年3月	利用者数100名。コロナ禍で予約があってもキャンセルも多いが、予定よりも多くの母親の利用がある。	1

*進捗状況：1 計画より進んでいる、2 計画どおり進んでいる、3 計画より遅れている、4 その他

② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
2.概ね達成の見込み
2.アウトカムの状況
A：変更項目 <input checked="" type="checkbox"/> 変更なし <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値
5.新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
プログラムに工夫の余地があるものは、屋内だけでなく屋外での活動も取り入れるなどした。

③ 広報 (※任意)

1.メディア掲載 (TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等)

キッズアリペ <https://iwaki-aliros.jp/cd/app/?C=freemagazine&H=list2&L=topList&F=pageCategory%3Am%7EqoPdgzDI&SM=CM>

2.広報制作物等

3.報告書等

たらちね測定報告会：7000部送付(会員及び支援者) https://tarachineiwaki.org/wpcms/wp-content/uploads/houkokukai_20220305_2.pdf

たらちね通信：7000部送付(会員及び支援者) https://tarachineiwaki.org/wpcms/wp-content/uploads/tarachine_report020.pdf

2020 年度事業 中間評価報告書（実行団体）

評価実施体制

内部／ 外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	インタビュー・定量評価 実施	鈴木薫	事業担当者 理事長
内部	インタビュー・定量評価 実施	木村亜衣	事業担当者 事務局長

A) 事業のアウトカムの進捗状況の評価

① 短期アウトカムの進捗状況

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
双葉郡から避難し、町外で生活する人々	初期状態を起点とし、事業実施状況の観察、参加者の声から変化を測る。	いわき市にもともと住んでいた方々と避難者の方々が心を開き、「あーおもしろかった」というような、継続参加度と満足度の高い状態になっている。	2024/3/1	<p>お話会の実施回数 1 回・参加者数のべ 13 名</p> <p>コロナ禍で中止になった回もあり、初期状態の方が、コンスタントに会を実施できていた。リアルで集まる事業では、コロナの感染拡大が大きく影響する。</p> <p>その中でも、やっと実施できたお話会は、参加者が楽しみにしているものである。大熊町やその他の双葉郡の町から避難し、福島県<small>ほうぼう</small>の方々に離れてしまった人たちが集まり、故郷の歴史の話をしたり、今、問題になっている子どもたちの話をしたりする。また、海外からの参加者もおおり、外部からの意見なども交え、客観的な意見交換をできる場にもなっている。今後も粛々と継</p>

				<p>続することが重要である。その中で、参加者の年齢が 80 歳を超える人もおり、高齢化に向けて、どのようにリアルで集まり続けられるかを工夫していくことも必要になる。</p>
<p>双葉郡（主に大熊町）から避難を強いられ町外で暮らす母子</p>	<p>初期状態を起点とし、事業実施状況の観察、参加者の声から変化を測る。</p>	<p>双葉郡に帰還するかしないかにかかると中立的で科学的な情報等を含む判断材料を理解し、主体的な意思決定を行っている状態になっている。</p>	<p>2024/3/1</p>	<p>お泊まり会実施回数 1 回・参加者数のべ 17 名 たらちねとの連携で行う放射能測定は随時実施。</p> <p>大熊町から避難している母親たちが主な変化の主体である。令和 5 年の大熊町への帰還の話が進み、避難した先で暮らしている母子に精神的動揺が発生している。初期状態では、母親たちは故郷の汚染状況を可視化することなく、「なんとなく、そうなんじゃないか」という心象で状況を捉えていた。そのため、帰還する人、しない人で漠然とした心の分断が生じていた。</p> <p>しかし、本事業の実施により、自分達が測定を行い、科学的データを知ったことにより、最初は測ることに反発を感じていた帰還予定の母親たちも、徐々に、そのデータがなければ子どもたちを守れないことを知り、母親全体が協力できる雰囲気が出てきた。それぞれ家庭の事情が違う中、その人たちが協力して子どもたちを被曝から守らなければならない上で、放射能の測定値は共通の認識としてなくてはならないものである。</p> <p>これまで帰還しない母親たちが主となり放射能の測定や町への環境改善の申し入れを実施してきたが、今後は帰還する母親たちが主となり行動できるようになることが必要になる。</p> <p>お泊まり会や測定会を繰り返す中で、それぞれの中に主体的な気持ちが生まれるよう働きかけたい。</p>

<p>原発作業、除染作業、その他の被曝を伴う現場で作業する人々</p>	<p>初期状態を起点とし、労働者自身の意識と雇用者の認識を観察し、変化を測る。</p>	<p>廃炉作業に従事する労働者が、必要な時に心身ともに健康診断を受けられ、自らの健康状態を理解し、主体的な意思決定が行えている状態になっている。かつ、年間70名程度の利用を目指す。</p>	<p>2024/3/1</p>	<p>受信者数 64 名（平均 12.8 名／月）</p> <p>2020 年から通称「大人ドック」を企画し、広報を続けてきたが、孫請け、ひ孫請けに相当する末端の作業員は生活も投げやりになっている人が多く、自分自身の健康にも諦めのムードが漂い、健康診断には積極的ではなかった。初期状況は、そのような状況であった。</p> <p>事故炉の後始末は数百年単位で考えていくもので、子どもたちが大人になってから関わることは間違いない中で、「作業員の健康を守る思考の構築」は絶望的なのかと感じた時期もあったが、本業実施から 2 ヶ月半が過ぎた頃から動きがあった。</p> <p>2020 年時点では、受診者資格を「原発作業に従事している人」に絞っていたが、本事業では「高線量地域で被曝を伴う労働環境で働く人」に広げたことが一つの効果であったと思う。</p> <p>双葉郡では、人が立ち入れない場所にも警備員が軽装で警備していたり、木々の管理のために高線量の山の中で作業をする山林の作業員もいる。高線量の廃棄物を中間貯蔵施設に運ぶ運送業者や、「居住はできないが、きれいにしておきたい」という所有者の依頼で高線量の住宅で除染作業をする女性たちもいる。</p> <p>それらの人々に幅広く声をかけることから、全体的な健康を守る気運が広がっているように感じる。それらの人々に直接的な知り合いなどの相互関係があるわけではないが、全体に「健康に気遣う」ムードの広がりはあると感じる。地方の狭いコミュニティの中の情報の広がり、ピンポイントで伝わるというよりも、全体的な雰囲気でも伝わることもあるのではないかと感じる。</p> <p>さらに大きなことは、作業員を動かす事業所が、本事業に申し込みをする動</p>
-------------------------------------	---	--	-----------------	--

				<p>きがあることだ。</p> <p>これまで作業員を動かす事業所は「余計なことはしたくない」「作業員は使い捨て」という意識があり、国で定められている健診以上のことはしたくない空気があった。</p> <p>たらちねで広報をしても反応が鈍く「やりたくないんだなあ」と感じることも多かった。</p> <p>しかし、最近では、事業所からの連絡も増えており、「社会が被曝労働を担う人々の健康を守る」認識が動き始めていると感じる。</p> <p>この火を絶やさず、活動を継続していきたいと思う。</p>
東日本大震災で原発事災害にあった、当時18歳以下だった人々	こどもドック手帳の配布数／手帳を持たない初期状態を起点とし、手帳を持った子どもたちの気持ち、保護者の気持ちを現場の観察と対象者の声を通して測る。	事故当時18歳以下だった人たちが、健康手帳を持ち、自分の健康状態を知ることが出来る状態になっている。	2024/3/1	<p>子どもドック手帳配布数26部。</p> <p>初期状態では配布部数ゼロからスタートしている。</p> <p>年間300部の配布を目標としていたが、実際には、そのペースでの配布はできていない。コロナ禍で、病気以外の病院での受診はしたくないという時期が続いていることも影響の一つである。</p> <p>その中で、定期的に（年1回程度）の受診にくる子どももいるが、手帳は1度配ると10年使えるようになっているので配布数に反映されない。その点を、今回の中間評価で見直し、配布目標数を変更した。</p> <p>※300部から50部に変更</p> <p>子どもドック手帳の配布目的は、「子どもたちの健康を科学的視点から可視化し、子どもたち自身が自分で健康を守る年齢になっても自覚を持って健康管理を継続していくこと」であった。変化の主体を「子どもたち」に特化し本事業は始まった。</p>

				<p>その中で、意外と多かったのは母親たちの心の呟きのような声だった。 「子どもの健康を守ることができて安心。」「事故があっても避難しなかったから心配だった。これで安心。」「事故が起きても、避難せずにここに住み続けているから。この健診で子どもの健康をちゃんと守っていることが自分でもわかる。」など、被災地に住み続ける母親の苦しい気持ちが見える話が多くあった。</p> <p>クリニックには、診察カードや保険証と一緒に子どもドック手帳を出す患者が多くなり、子どもドック以外にも、子どもの健康の記録をとっておきたい保護者の気持ちが育っていることを感じる。</p> <p>母親にとって母子手帳は特別なものである。 母子手帳は多くの場合、母親が手元に置いておくものだが、子どもドック手帳性は、子どもが独り立ちするときに子どもに手渡すものである。 「その時のことを考えると、ジーンとする。」という母親もいた。</p> <p>子どもドック手帳の存在により、保護者の子どもを思う心が可視化され、被災で傷ついた親心を癒すことは、初期状況の時には予想していなかった。 手帳の配布と子どもの健康診断は、粛々と続けていきたいと考えている。</p>
東日本大震災で被災した地域で生きる子どもたち	こころのケアプログラムの利用回数と利用状況の観察。保護者が子どもの心を守る意識の自覚	保護者が、子どもに起こりうる精神的疲労の実態とその対処法について理解する。精神的疲労のあ	2024/3/1	<p>のべ利用者 59 名 (11.8 名/月平均)</p> <p>数年続く、コロナ禍の利用となるが、コロナ渦であるからこそ需要もあるため、施設のキャパ相当の利用者がいる。 子どもたちは、不登校であったり、親との関係から自己肯定感が低くなっていたり、抱える事情は様々である。</p>

	<p>を持って施設を利用しているかなど。</p>	<p>る子どもが、必要なケアが受けられ、その精神的疲労が改善されている。</p>	<p>身体心理マッサージのプログラムも準備しており、年齢が上の子どもでも利用できる体制ができていますので、中学生や高校生も通所しています。</p> <p>思春期の子どもたちは、内面の激しくコントロールできない感情を言語化することに苦労していることが多く、結果的に口数は少ない。来所した時は緊張した様子が見えるが、マッサージを受けた後は、体だけでなく、心もほぐれて、ポツリポツリと学校の話をしたり、部活動が大変な話をしたりする。昔と違って、少人数クラスの中で、友人とも担任とも距離が近い環境で生活する子どもたちからは、人間関係を維持する苦労が感じられる。</p> <p>身体心理マッサージは、非言語ケアの象徴的なプログラムである。特に、人と話したくない思春期の子どもたちにとっては必要だと感じる。</p> <p>2011年の東日本大震災では地震、津波などの自然災害に加え、原発事故による放射能から逃れるために避難を繰り返すなど、子どもたちも過酷な体験をしている。広い家で生活していた子どもたちは、狭い避難所での暮らしに違和感やストレスから奇声を発したり、身近な人たちが次々に亡くなったりと平時ではないような体験をしている子どもが多い。</p> <p>利用者の子どもたちの中には、発達の特徴を感じる子どももいるが、それが先天的なものなのか、乳幼児期の過酷な体験からの後天的なものなのか、今後、専門家の協力も得ながら見極めていくことが必要になると考える。</p> <p>あとリエ・たらちねは、子どもたちの心の安全基地としての存在であり、そのことを大切に事業を継続していきたいと思う。</p>
--	--------------------------	--	--

<p>東日本大震災の被災地の母親たち</p>	<p>母親たちの相談利用件数と利用状況の観察。母親たちが施設を利用することによる心持ちの変化を見ていく。</p>	<p>子育て中の母親の精神的疲労を改善・軽減のための必要なケアが受けられている。また、同活動において、母親が不安を打ち明けられる機会があることで精神的負担が軽減され、より安心感のある子育てをできる状態になっている。</p>	<p>2024/3/1</p>	<p>のべ利用者 100 名（平均 20 名／月）</p> <p>地震・津波・原発事故の複合災害は、人々の「物語・ナラティブ」を奪ってしまったと感じる。特に原発事故の話がしにくい環境がある。原発事故の後始末は、時間の経過とともに問題が次々と噴き出し、本来は市民の間で活発に議論されるべきものであり、選挙の争点になるぐらいの、私たちにとって重要なことである。しかし、実際には誰も語ろうとしない。</p> <p>今後、数百年単位で事故炉の後始末をしていく地域であるにも関わらず、大人たちは口を閉ざしている。</p> <p>また、双葉郡から避難してきたことを自分の子どもにも隠している保護者も多い。さらに、賠償金が打ち切りとなり、仕事につかなければ生活していけないにも関わらず、精神的疲労が激しく、仕事につけない母親もいる。新興宗教に入信している様子が見える母親もいる。子どもたちを連れて宗教の場に通っていることを子どもが話をする場合もある。</p> <p>「経済的復興は進んでも、心の復興は進まない。」と語る母親もいる。</p> <p>これまでもあった家庭内の問題に加え、原発事故による精神的被災が地域の心の問題を深刻にしている。</p> <p>あとリエ・たらちねでは母親たちに「物語・ナラティブ」の方法を取り入れ、心の井戸に沈んだ鉛のような悲しみを少しずつ解消してもらうことを実施してきた。</p> <p>また、ヨガによる瞑想の時間も心身のリラクゼーションタイムとして取り入れ、休息してもらっている。</p>
------------------------	--	---	-----------------	---

			<p>緊急介入の必要がある場合は、スーパーバイザーの渡辺久子医師に来所していただき、利用者と直接面談をしてもらうこともある。</p> <p>精神科からの薬を処方され、外に出るのも大変な状況の場合は、団体の車で送迎サービスを実施しているが、それでも出てこれない母親もいる。</p> <p>その場合、私たちが「気にかけている」ことを繋ぎ続けるために、一方通行のメールでも、季節の挨拶や、軽いご機嫌伺いなどのメールは継続している。また、あとりえ・たらちね以外の場所でのママ・カフェなども開催し、母親たちの語りの場を作るイベントも実施している。</p> <p>様々に工夫をしているが、「これをしていけば問題ない」ということもなく、本事業の活動は試行錯誤の連続である。</p> <p>今後も、試行錯誤を継続し、少しずつでも成果が得られるよう尽くしていきたいと思う。</p>
--	--	--	---



② アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」(※任意)

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察
双葉郡から避難している高齢者が生きる喜びと心の平安を感じ、継続的に集まっている状態が継続されること	事業に関わるスタッフの数も増え、事業の広がりが見えてきた。	<p>実施回数は減ったが、実施する・しないなどの相談の機会が増え、対話の機会も増えた。担当スタッフも増えて、事業を取り巻く小さな社会が少しずつ大きくなっている。</p> <p>また、この取り組みに巻き込まれるように、大熊町の人々以外の高齢者も、自分の出身地域やいわきの歴史について興味を持って話をしにくるようになった。「楽しい話ができる場所」として認識されるようになってきた。</p>

<p>双葉郡に帰還するかどうかに関わらず、母親が子どもの健康を守る共通の目標のもと、母親同士が分断ではなく交流が続いていること</p>	<p>紆余曲折ありながらも、母親同士の関係が徐々に強まり、「子どもを守る」意識がまとまってきている。</p>	<p>母親たちは、お互いの立場の違い（帰還する・しない）に配慮しながらも、子どもの健康と生活を守るという点で一致し、放射能の測定や町への除染申し入れなど協力し実施してきた。大熊町からは、「申し入れの書類の書式が正式なものではない。」など、難癖をつけられる一幕もあったり、振り回されながらも、心一つに行動することができている。その要には、汚染を可視化する放射能の測定活動がある。見えないものを可視化し、共通の目的を持つことが、分断されそうになった母親たちの心を繋いだ。</p>
<p>（双葉郡で作業する）廃炉作業に従事する労働者が、希望する際に健康診断が受けられ、必要な情報を鰓得ていること</p>	<p>作業員のための健康診断、通称『大人ドック』の実施により、作業員自身や事業所の健康意識は高まった。また、事業を実施する私たちの意識も高まった。</p>	<p>これまで、作業員は、自分の健康に頓着しない、諦めの様子が見えた。しかし、事業実施による医療者の働きかけに応えるように、作業員自身が健康に対する意識を自覚して、検診を受ける姿が見られた。たらちねクリニックの主役は子どもたちであったが、本事業を実施したことで、子どもたちは成長し、成人して次の世代を育てることが活動から見えてきた。それにより、クリニックの医師、看護師、管理スタッフの視野も広がり、地域が抱える問題をより広く見つめることができるようになった。</p>
<p>震災当時 18 歳以下だった人々が、自分の健康診断等の履歴を記録した手帳を持つことで、健康状態にかかる証明ができ、安心感を得ていること</p>	<p>子どもドック手帳の配布により、子どもドック受診の数も増えてきた。手帳の配布により子どもの健康を守ることが可視化された。</p>	<p>手帳の配布で、子どもの健康を守ることが可視化された。それにより、保護者の意識も高まってきた。見えないものを可視化することが、様々な部分で人々の意識に働きかけをする様子を感じる。</p>

<p>いわき市の18歳以下の子どもが震災からコロナまでの精神的疲労を癒しながら、健やかに成長していけること。</p>	<p>事業の利用件数は、計画通りに進んでいる。また、それにより、子どもたちが抱える問題がより鮮明に可視化されてきた。</p>	<p>事業を進める中で、以前から見え隠れしていた不登校について鮮明になってきた。不登校の子どもが増えていることや、そこに至る事情の根深さなども見えてきた。</p> <p>ふくしま100年基金の協力をいただき、こういったケースに向き合うための勉強会を開き、団体としての心構えや危機管理の基盤強化を行うことができた。今後も、学びは継続し、たらちねにある他の事業資源を生かすことなど含め、展開を模索していきたいと思う。</p>
<p>精神的疲労が著しい子育てをする母親が自分を大切にしながらゆとりある気持ちで子育てを行えるような健康状態にあること。</p>	<p>両親での利用が増えてきた。母親が担う役割の大きさと負担は想定範囲内であったが、父親たちの精神的閉塞感も可視化されてきた。</p>	<p>「お母さんは大変だ。疲れている。」ことはわかっていたが、お父さんたちも大変だなあ、と思うことが増えた。子どもの問題を一緒に考えるため、父親の来所もある中で、家庭では話せない「自分は親としてこれでいいのか？」などの心配を口にする人もいた。</p> <p>夫婦で話し合うと険悪になることも、たらちねで話すことで、夫婦の間でも距離感を保って語り合えたり、考えたりしながら、にこやかに自分の気持ちや不安を口にする父親たちの姿を見ると、男の人は、こんな話をする場所がないんだろうな、と思ったりする。</p> <p>今後も、父親との対話を視野に入れていくことは大事だと思う。</p>



事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
<p>事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は難しい</p> <p>と自己評価する</p>	<p>事業により定量的な評価は凸凹状態だが、定性的な内容では、少しずつでも前に進んでいる。</p> <p>心の問題は深く複雑で、初期状態で想定していなかった反応があったり、定期的に動かしていくことが困難だったりする。とても神経を使う事業である。</p> <p>その中で、各部門のスタッフが日々の努力を地道に継続し、1歩ずつ前に進むことを実感できている。</p>

B) 事業の改善状況の評価

① 事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の適切性	活動は、事業計画で想定している支援対象者に届いているか	おおむね届いている。	<p>支援対象者の実数は本来、とても多く、実際に私たちが関わっている人数との落差はある。支援が必要な全ての対象者と関わるのが理想だが、たらちねの規模では難しい。しかし、対象者の一部と関わり、支援の形から協働の形へと進化することにより、最終的な受益者は大きく膨らむと思う。</p> <p>私たちの力は小さくても、同じ志の人が増えれば、それだけ活動の受益者は増えていく。</p> <p>そこを目指して頑張りたいと思う。</p>

実施をととした活動の改善、知見の共有	事業で得た知見は、多様な関係者に共有され活かされているか	少しずつ共有でき始めている。	中間地点まで進んで、ようやく知見の共有の方法が見えてきた。今後、本事業で得た知見を、どのように可視化し、共有するか、後半の事業実施で、さらに考えながら進めていきたい。
組織基盤強化・環境整備	事業終了後も持続可能性を高めるような戦略が計画に含まれているか	事業を実施していく中で戦略を立てながら進めることができている。	心のケア全体が、神経を使う事業でもあり、山あり谷ありの日々だが、その中で、問題を乗り越えながら活動を継続していくスタッフの姿に成長があると感じる。また、不登校の勉強会や、スーパーバイザーの精神科医や臨床心理士の協力から、スキルも少しずつ増えて、継続できる感覚が強くなってきた。

② 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

・双葉郡（主に大熊町）から町外に避難移住した母親たちに大きな変化があった。

被災者の複雑な心情から、故郷の放射能汚染を知ることが恐ろしく、この10年以上、測定値というものに触れずに暮らしてきた人たちが、今は、積極的に測定を実施し、感情で憶測を巡らせ怯えるのではなく、科学的なデータを元に次の行動を話し合うようになった。原発事故では、多くの人々が、心の分断で苦しんだ。可視化できる共通のデータをもとに、それぞれの意見を交換する土台ができたことは、成果だと思う。

・高線量地域で働く人々に健康管理の意識が芽生えたことは変化である。

これまで、自分の健康にすら投げやりな感覚であった人たちが、健康に気をつける意識が芽生えたことは、未来の子どもたちの労働環境につながる重要な変化である。2015年頃から、たらちねには、原発作業員がホールボディカウンターの測定に来るようになった。双葉郡では道路に置かれた車載式のホールボディカウンターでの測定が常で、待合も簡素で雑なものだった。たらちねに来ると、お茶が出され、待っている間にスタッフとの情報交換もできる環境に驚いた人が多かった。人が人のことを気遣うことが普通にできれば、その人自身が自分のことに気遣うこともできるようになると感じる。本事業での変化は、そういうことだと思う。

・親たちが子どもの健康を守る意識を実感できる変化があった。

子どもドック手帳の配布は、親が子どもの健康を願う気持ちを可視化するものである。

被災地から避難せずに暮らし続ける親たちは、これまで「子どもを守る親の気持ちと行動」を可視化し示すことができなかった。子どもドック手帳を得ること、健康診断を子どもたちに受診してもらうことで、その姿や気持ちが可視化され、親自身も自分の強い気持ちを改めて認識することになった。

今年、岡山の保養活動にボランティアに行ったいわきの高校生が、岡山のボランティア先で「いわきにはたらちねがあるから、俺たちは守られている。だから大丈夫だ。」と語り、それを聞いた主催者が、たらちねに見学に来たことがあった。子どもたちを守り育てる存在が、子どもを守ることを明確に示すことが大切だということを、私たちは子どもたちから教わっている。子どもドック手帳は、その象徴だと思う。

③ 事前評価時には想定していなかった成果

初期状態の時に想定していなかった問題の可視化ができたことは成果の一つである。

心は目に見えないので、事業の実行側が予測していないこともある。事業をやってみて、初めてわかることも多かった。

④

⑤ 事業計画の改善の必要性の確認

- 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇒アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている

事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
<p>残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために</p> <p><input type="checkbox"/> 事業計画は適切に改善されたといえる</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 事業計画を適切に改善する見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 事業計画の改善について、課題が残っている</p> <p>と自己評価する</p>	<p>ここまでの実施状況で、変化の主体を取り巻く社会的背景とニーズに適切に反応することができているので、今後、新たな問題が発生したとしても、改善できる見込みがある。</p>

⑥ 中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

早急、ということは難しいかもしれないが、双葉郡に人々が気軽に集まれる拠点施設があるといいと思う。特に、大熊町と双葉町である。役場や公共施設ではなく、もっと市民が自由に動かせる施設があると、帰還した母親たちも集まれるし、帰還した母親たち主体のイベントなども実施しやすいと思う。

添付資料

活動の写真（画像データは1枚2MG以下、3～4枚程度）

写真キャプション

向かって左上から横に

- ・子どもドックの様子・箱庭遊び①・子どもドック手帳の表紙・お泊まり会の下見の様子（大熊町のお母さんたちと一緒に）・箱庭遊び②
- ・大熊の放射能測定（大熊町大川原地区）・小川のママカフェの様子



